

被爆72周年 原水爆禁止世界大会広島大会フィールドワーク 8月5日「安野発電所への中国人強制連行・ 中国人被爆の歴史を歩く」

スクラムユニオン・ひろしま 土屋 みどり

今年で3回目の取組となったこのフィールドワークに初回から参加してきました。全国からの参加者は、地元広島を含め初回は20名、昨年は19名、今年は12名でした。

戦時中「国策」として行われた中国人強制連行の事実は、この広島においてもあまり知られていません。戦争末期国内の労働力不足を補うため日本政府、日本軍、日本企業が一体となって実施した犯罪行為です。中国から強制連行した中国人360人は、安野発電所建設工事で過酷な労働に従事し、満足な食事も与えられず、けがをしても治療さえ受けさせてもらえず、広島での被爆死を含め29人がこの異郷の地で亡くなりました。

参加者は、猛暑の中、収容所跡地、工事現場跡、「安野 中国人受難之碑」などを歩き、説明を聞き、強制連行・強制労働の爪痕を辿っていきました。

平和公園を出発し、最初に訪れたのは「安野 中国人受難之碑」です。行きのバスの中ではDVD「50年目の叫びー広島・安野への中国人強制連行の真相」を鑑賞し、歴史的経過や基礎知識を学びました。バスを降りて、今も中国電力が稼働させる安野発電所のそばにある「受難之碑」に行きました。

工事を請け負った西松建設との和解の後、和解事業のひとつとして建立されたこの碑には360人の名前が刻まれており、「こうした歴史を心に刻み、日中両国の子々孫々の友好を願ってこの碑を建立する」と記されています。歴史的事実を継承し、日中友好、平和への力にしていかなければならないと強く思いました。

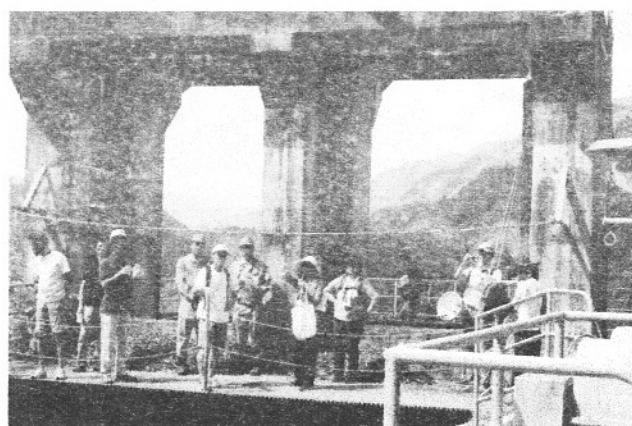
西松建設裁判は、1998年に広島地裁に提訴され、歴史的事実を認め、受難者・遺族に対する謝罪、補償を求め始まりました。2009年の和解の成立まで11年もの歳月がかかりました。その裁判闘争の過程や裁判に



「安野 中国人受難之碑」の説明を聞く

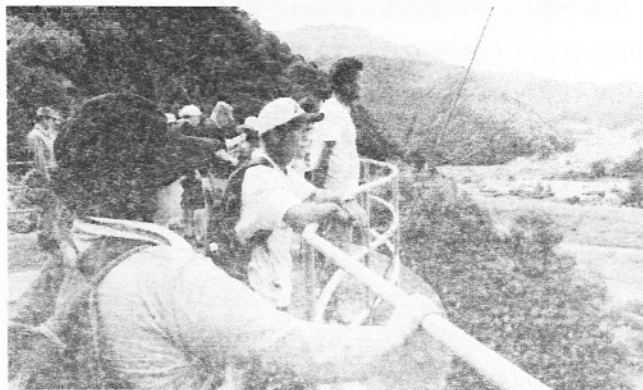
いたる前の活動についても、川原洋子さん（広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会）たちの粘り強い闘いがあったことに心より敬服します。強制連行・強制労働・被爆の実態解明、訪中して生存者・遺族への聞き取り調査など丁寧に行われています。また、生存者・遺族を日本に招いて証言集会などを開催されました。1審は敗訴、2審は逆転勝訴、最高裁では逆転敗訴（不当判決）でしたが、異例の付言がついたことで後の和解につながりました。

碑を後にし、長い階段を上って、坪野貯水槽まで上がり、坪野中国人収容所跡・工事現場跡を望みました。猛暑の中、このフィールドワークの中で一番大変な道

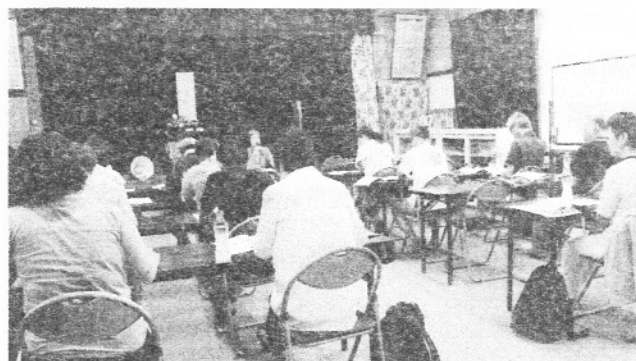


山道を65m登って坪野貯水槽を見学

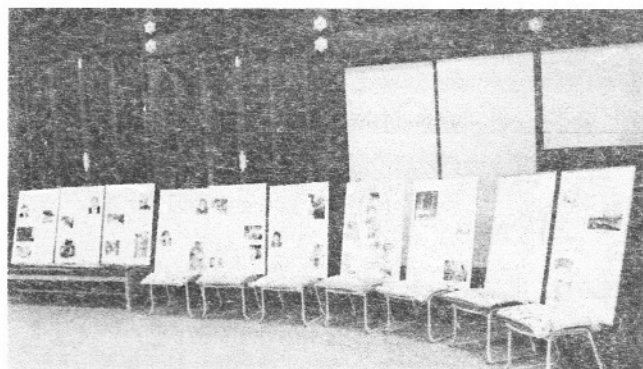
のりでした。しかし、当時中国人たちは、この階段を重たいセメント袋を肩に担ぎ、何往復もしたと聞かされました。しかも、酷寒のなか靴も与えられてなかった



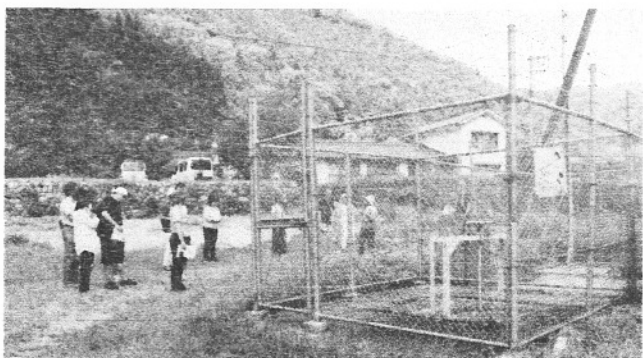
坪野貯水槽から坪野収容所跡の位置を確認する



善福寺のかつて幼稚園だった部屋で説明を聞く



善福寺本堂にパネルを展示
「安野発電所への中国人強制連行」(全 25 枚)

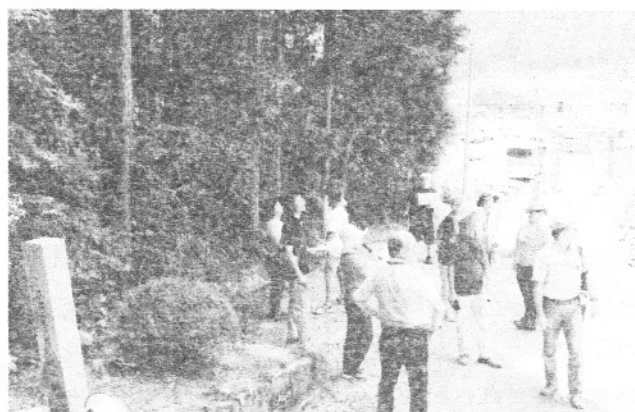


フェンスの真下を中国人が掘った導水トンネルが走っている。
今年はじめてプログラムに加えた地点(津浪)

たので、セメント袋を足に巻き付け、外れないように縄で縛り、雪道を通ったのです。食事と言えば、男性の握り拳大の饅頭が1個だけという粗末なものだったそうです。体力がなくなり、セメント袋を1人で担げず、2人で担いでいた人もいたということです。

その後、善福寺に行き、パネルやトロッコの模型を見ながら説明を聞きました。

少し早い昼食を済ませ、パネルを見学したあと、善福寺を出発しました。津浪中国人収容所跡を経て、香草中国人収容所跡に行きました。本来はここで、当時のことをよく知っている栗栖薫さんに証言を行ってもらう予定でした。しかし、体調を崩され、今回は現場に足を運ぶことができず、川原さんから説明を受けま



香草収容所跡(左手の杉林の中)

した。栗栖さんのお父さんは、1945年2月から香草の中国人収容所の監視員をするようになり、当時15歳だった栗栖さんはよくお父さんに連れられ収容所に行っていたそうです。収容所の中の様子や中国人の様子を目の当たりに見てきたそうです。衣服はぼろぼろで、寝床と言えば板張りにムシロを敷いただけ、布団とは言えない中国から持ってきた薄い布をかけて寝ていた、満足な食事は与えられず、雪道を裸足の人もいたという。病気になってもけがをしても治療を受けさせてもらえない、本当にむごい、悲惨な生活だったということでした。

再びバスに乗り、700メートルほど離れたところにある香草の工事現場跡でバスを降りました。昨年までの見学地に、今年新たに加えられたところです。ここでは、トロッコで石を運び出す作業中にケガをし両目を失明した宋継堯さんのことが話されました。トンネ



宋継堯さんが失明した事故現場に立って、下り坂の急カーブを確認する（今年はいじめてプログラムに加えた）

ルを出た下り坂は急カーブになっており、トロッコがひっくり返り崖の下に放り出されました。石が落ちてきて頭を打ち、目には砂がいっぱい入り泥水で目を洗っただけで、地面に座って仲間の仕事が終わるのを待っていたそうです。

治療を受けさせてもらえず、目はだんだん悪くなり、あまりの痛さに自分で片目をつぶし、少し痛みは和らいだが両目失明したということでした。人を人と思わぬ扱いに、これが戦争なのだと痛感しました。

最後に、土居収容所跡と取水口に行き、平和公園に帰ってきました。

強制連行された中国人の方たちは、訳もわからず収容所に連れてこられ、そこから日本で強制労働をさせられました。人生を奪われ、健康を奪われ、命を奪われた人もいます。そして、家族は、突然いなくなった夫、父親、息子の消息もわからず、生活が一変したと思います。幸いにも帰国できた方たちも、健康を害し、満足に仕事もできない状態で、家族を養うこともできない、子供を学校に行かせられないなど苦難は続いたと思います。

このフィールドワークで、収容所跡地や工事現場跡地を自分たちの足で歩き、当時の様子を聞き、強制労働の苦難、戦争の悲惨さを肌身で感じ取ることができました。戦争、平和について学び考える意義あるフィールドワークであったと思います。私たちは、こうした歴史を語り継ぎ、日中友好、反戦平和に向けた運動を力強く構築していく責任があると、改めて認識したフィールドワークでした。

＜参加者の感想——アンケートより＞

《福岡県 30代》

福岡在住のため、どうしても情報が一部分に偏ってしまいます。広島で暮らした中国の方々が受けた差別や、日本の加害の歴史にも目を向けていかなければと思います。特に印象に残っているのは宋さんのお話です。16才で日本に連れてこられ、失明すると「使いものにならない」と、勝手な都合で放り出された宋さんのような方がたくさんいたのだなあとと思うと、苦しくなります。「大きなイチョウの木があった」の話を聞き、日本で懸命に生きようとした少年の姿を想像しました。教員として、生徒と共に加害の歴史について考え、学び続けねばと改めて思います。今日は本当にありがとうございました。

《福井県 50代》

歴史的な事実を中国人だけでなく日本人の証言をもとにして明らかにしていることや、負の歴史を友好の要にしている活動に共感を覚えることができた。

《東京都 50代》

トロッコのカーブ、崖など、自分の目で確認できる内容がとても勉強になりました。豊富な資料も素晴らしかったです。来年に向けて単組内で宣伝します。

《東京都 50代》

強制連行をハッキリとした説明ができています。平和運動的に広島に来たが、広島でこのようなガイドを聞けるとは意外でした。もっと大きな規模で活動し、広めてもらいたい。

《北海道 30代》

戦争がもたらす人間性の崩壊、人は過ちを犯すことを、改めて強く感じました。安野の和解に至るまでの過程を見ると、当時の政府の対応と今の政府の対応に似ているところがたくさんあり、平和に関する様々な法整備の戦中との類似性と重なりました。

強制連行、南京大虐殺、慰安婦など、加害の歴史を学び、語り継いでいくことの必要性、そして、その活動を精力的に行われているみなさんへの尊敬の念を強く感じました。また、ここまで詳細に自分の足で歩いてインタビューして調べ、勝訴にまで至るほどの計り知れない努力と強い思いに、心から敬意を表します。私も語り継いでいきたいです。

同じ人間がしたことと思うとゾッとしますが、決して過去のことでなく、今もヘイトデモを行う人たちがいることも事実です。ほんの1週間ほど前、札幌でもありました。デモ隊十数人に対し100人を超える市民がカウンターに押しかけ、ヘイトデモは途中で中止されたそうですが、そのような人たちが現在もなお少なからずいるということから目を背けず学び続けると共に、冷静に、穏やかに、そして力強く、反戦・差別撤廃の意を示していきたいと思います。本日は本当にありがとうございました。